

# 表現と思考

—主題について(1)—

木原 茂

## 1. アメリカの大学における作文教育

コロラド大学で数学を教えた藤原正彦氏は、アメリカの学生と日本の学生とを比較して興味ある指摘をなされている。それはアメリカの学生は知識量は少ないが、論理的に考え、処理する能力に勝れているということである。

私の経験からいうと、あちらのフレッシュメンの知識量は驚くほど乏しい。歴史、地理、科学一般に関しての知識はいわずもがな、母国語の英語だってかなり怪しい。とりわけ数学については目を覆いたくなるほどだ。<sup>①</sup>

と言われ、その原因は、彼等の高校までの教育が知識の詰め込み教育でなく「おもしろおかしくやって行く」教育にあるためだとされている。もっとも、「おもしろおかしく」と言っても、ただ遊んでいるわけではなく、高校までの教育の中心は、「知識を詰め込むことよりも、ものごとをいかに論理的に考え処理するか、問題点をどのように発掘し解決するか、とか、議論をいかに展開させていくかなどといった基本的なことに重点が置かれているらしい」と述べられている。

彼等と対照的に、日本人については、「知識の豊富さにおいては格段に優れているが」、「概して論理的思考や表

現に弱く、ロベタで、いつまでたっても真の意味での国際人になり得ないでいる」と批判され、また「科学技術で世界の一流国を作り上げた日本人が、論理的にものを考えたり表現するといふごく当り前のことをうまくし得ないこと」が彼等にとっては不思議であり、今日「日本が政治経済の面で国際的に孤立化しそうな」原因もこういう所にあると指摘されている。

これと似た批判として、矢野暢氏（京大教授）は、N・H・Kの政治座談会（「平和への政治選択」56・8・16）で、日本の政治家は二十世紀から二十一世紀の世界をどう動かして行くかについてのリーダーシップをもつべきであるが、それと同時に、表現する言葉をもつべき必要があると説かれた。日本の政治家の言葉が外国の人に分らなくなってきたというのである。

わが国の学生が、ひいてはその卒業生が論理的な表現力を持たないということは、単に一教科としての作文の問題ではなく、わが国の政治・経済の国際化に大きな影響をもつことがらなのである。

アメリカの学生が論理的思考力に勝れている原因として、藤原氏は主として高校までの作文教育のあり方を述べられているが、高校だけではなく、大学の教育においても、この点に彼我の間に大きな違いがあることを上智大学の学長、ヨゼフ・ビタウ氏は一般教育研究会の、セクター開設五周年記念の記念講演で指摘されている。<sup>⑨</sup>

ビタウ氏は、まずアメリカの諸大学における一般教育の目標は、次の五つの項目であるとされている。

- (1) 表現力の養成
- (2) 数理的能力の養成
- (3) 論理的思考法
- (4) 紳士としてのマナー

## (5) 中核となる文化遺産への接近

この中でも、特に(1)の表現力の養成が一般教育の最も根本であり、中核であることについてつぎのように述べられている。

△一般教育の重点の▽第一は言葉を使う技術・表現力です。例えば日本の大学において作文を教育している大学はいくつかありますが、イングリッシュ・コンポジション△日本で言えば、日本語の作文▽を二十名〜二十五名のクラスを編成し先生が徹底的に指導するというのは皆無ではないでしょうか。すなわち教養人の最初の条件は頭の中のアイデアをまとめ表現する能力です。表現力教育はアメリカの多くの大学の入学案内等に特徴としてうち出されています。日本の大学の入学案内を見ても「学生の表現力を育てる」と打ち出している大学は一つもないと思います。△中略▽大学の一般教養できれいな表現力を身につけなければ専門課程に進めないという前提が、アメリカの大学では強くうち出されています。なぜかという、教養人になるための最初の条件はこの表現力だからです。(△▽内は私の補注)

以上、藤原氏、ヒタウ氏何れも高等学校、大学と、表現による論理的思考力の教育が彼我の間で格段の差があることを指摘されている。大学の一般教養、すなわち教養人であることの中心が外国語であるわが国と、頭の中のアイデアをまとめて表現する能力の養成にあるとするアメリカとの違いは一体何に起因するのであろうか。その歴史的背景を考えることは意義あることであるが、ともかく、G・N・P世界第二位となり、国際交流も盛となった今日のわが国の大きな情況変化は、一般教養のあり方にまた新しい変革を迫っているというべきではなからうか。

## 2. 文章の主題

### A 形式と内容

では、アメリカの、表現による論理的思考力を養う学科である作文の実質的内容は何であろうか。それは一般にコンポジションとよばれるものである。

コンポジションとは、組み立てる方法であり、思考を構成する方法である。構成するとは、単に部分を集めることではなく、一つの目的に向って、部分をよく機能するように集めることである。ここで重要な概念は二つある。その一は、はっきりした目的をもつことであり、その二は、部分をすべてよくその目的を支えるように作ることである。前者が文章の中心、または主題とよばれるものであり、後者がそれを支える細部である。

従って、作文の第一は文章の主題を明確にすることにある。要するに何が言いたいのかわからない文章、筆者の意見が明瞭でない文章というのが最低なのである。

ところが、われわれの書く文章には、この主題の明瞭でない文章が実に多い。われわれは、頭の中に思いつくことを思いつくままに書くという方法を取りやすい。この方法によると、頭の中の思考というものは勝手に流れて行き、中心から離れ、初めの目的とした所とは別のところに至りやすい。そこでまずこの中心主題のはっきりした文章を書くという練習を徹底的にする必要がある。文章に明確な中心主題がなければならないということを知的に理解することは容易であるが、実際に主題の明瞭な文章を早くということは厳しい練習によってのみ可能なのである。

文章の主題を明確にする方法として、短いエッセイを書くには、まず主題文を書くという方法がある。要するに

自分は何が言いたいのか、一文に書いて文章の初めにおく。そうして書き終えたら、各段落の要旨を書き出し、それらが文章全体の主題をよく支えるものかどうかを確かめる。主題を支えない、主題と関係のない段落は削るか、書き改める。または全体を見通して主題の方を改めなければならない場合もある。こうして文章全体が明確な主題によって統一されるようにするという方法である。

このような練習をして、わたしたちはまず明確な主題を持つ文章を書く力をつける必要がある。学生の書く文章、一般人の書く文章には主題の明確でない文章があまりに多い。

しかし、近年、入試に作文を課する大学もふえ始め、高等学校でも作文に力を入れはじめたためか、形式的に主題の明確な文章が書ける人は漸次多くなりつつある。これは望ましい傾向である。

しかし、今度はそれらの文章の主題は内容的に浅く、単純であるという欠陥を持ちはじめて来ている。主題を形式的に明確にすることができれば、つぎにはその主題をいかに深いものにすればよいかが問題になる。

#### B 「なぜか」を考える

主題文の内容を深める第一の方法は「なぜか」を問いかけていくことである。

例えば、芥川龍之介の「鼻」を読んで、感想文を書く場合を考えてみよう。

最初に考えつく主題文はたぶん次のような素朴なものであろう。

私は芥川の「鼻」が好きだ。

しかし、これではよい主題文にはならない。そこで、次のような自問自答を繰り返していく。

(自問) なぜ好きなのか。

(自答) それがおもしろいから。

(自問) なぜおもしろいのか。

(自答) わからない。

(自問) 考えよ。一生懸命、なぜかを考えよ。

(自答) 私は禅智内供の行動のしかたがおもしろいからだと思う。

(自問) なぜ禅智内供の行動のしかたはおもしろいのか。

(自答) その第一は、内供が内心望んでいることと、ことばに出して言うことが違っていて、そこに人間の虚栄心が見えるからだと思う。

(自問) 内供だけが特殊な人間なのか。他の人々は内供とは違った人たちなのか。

(自答) 他の人々も、他人が不幸から脱出するのを見ると何だか物足りない気がするという、傍観者の利己主義と呼ばれる心理を持つことが描かれている。

(自問) すると、この作品のおもしろさは何で、その主題文はどう書けばよいのか。

(自答) 芥川は、人間を動かす心の裏側を鋭くえぐっている。この人間理解の深さが、内供の長い鼻という異常なものや、周りの人々の滑稽な行動と相まって、深いおもしろさを感じさせるのだと思われる。

だから主題文は

「芥川の『鼻』のおもしろさは、人間のエゴイズムの滑稽さを読者に発見させてくれるところにある。」とするのがよいと思われる。

このように「なぜ」を問いつめることによって、最初の「好きだ」とか「おもしろい」とかいう自分の主観的な判断は、作品で書かれていることの中心を述べる客観的な叙述に移行することができる。この主観から客観への移

行ということが論説の主題文であることの一つの条件である。

## C 対立をとらえる

### 1 清水幾太郎氏の説

主題を深めるための第二の方法は対立をとらえるということである。論説文が他の種類の文章、例えば描写文や物語文や説明文と違うところは、それが意見の対立を条件とするということである。意見の対立がなければいきいきとした論争は生れない。論説の主題は対立をとらえるところに成立すると言つてよい。

このことについて清水幾太郎氏は、自分の経験をもとにつきのよう述べている。

そうは言つても「八百屋の隣りは魚屋で、魚屋の隣りは……」と書かずにはいられない破目に陥ることが多い。私自身、それを避けようと努力しながら、それ以外に方法がないことが度々ある。しかし、この方法——というより、これは無方法なのである。——に従えば、万事がお仕舞になるとは知っているのに、苦しい努力を続けたことがある。そういう経験の結果、一種の心構えのようなものが私の内部に出来上ってしまった。それは、「八百屋の隣りは魚屋で……」と書かざるを得ない時は、まだ本当に書ける段階までこちらが来ていないということである。言ってみれば、問題への踏み込み方がまだ足りないのである。私はこう考えるようになった。それなら、もっと踏み込めば、どうなるのか。本当に深く踏み込めば、必ず対立物が現われて来る。深く踏み込むというのは、結局のところ、十分に考え抜くこと、よく調べ上げること、もう済んだと思う作業も更めて繰返えしてみる。何れにしろ、深く踏み込んで行けば、最後のところで、きっと、或る対立関係が現われて来る。白いものと黒いもの、極大のものと極小のもの、高貴なものと低劣なもの、積極的なものと消極的なもの……こういう相互に際立って対立するものが現われて来る。それが現われないうちは、書くべきではな

いのである。そこまで来て、気がついてみると、「八百屋の隣りは魚屋で……」という叙述方式は何処かへ消えている。叙述方式が消えるより前にそういう現実が消えているのである。源氏と平家というように際立って対立するものなら、誰でもドラマチックに書くことが出来る。どう書いても、自然にドラマテックになる。<sup>⑧</sup>

ここで清水氏は、論文の発想として、「分析し、並列する構想」と「対立をとらえる構想」とを対置して、前者を否定し、後者を称揚している。分析し、並列する構想も対象によっては必要であり、有効な場合も多い。この方法も論文を書くには修練すべき重要なものではあるが、確かに清水氏の言われるように、この方法による限り、論文は平板となり、読者の興味をひき難い。その点、対立するものをとらえる構想は緊張感を生み、生き生きとして読者の興味をひき易い。

では、その対立には具体的にはどのようなものがあり、どういう種類があるのであろうか。清水氏が例示されているのは「白いものと黒いもの、極大のものと極小のもの、高貴なものと低劣なもの、積極的なものと消極的なもの」及び「源氏と平家」という程度に止っている。しかし、一体、実際の論説文はどのような対立をとらえているのか、そのパターンが明らかにになれば、われわれが論説文を書く上で参考になるに違いないと思われる。

## 2 文学における対立

ところで、論説文のテーマではないが、文学におけるテーマについては、ケストラーはつぎのような対立葛藤をあげている。<sup>⑨</sup>

### I 人間と宇宙の対立

これは人間の、全知全能の神たんとする欲求と人間に課せられた自然、または天与の限界との戦いである。例えば「禁断の木の実」(人間は知恵の木の実を食べたために理性の目が開け、善悪を知るに至った。が、この



ことは人間に苦しみや死をもたらした。「バベルの塔」(人間は天に届く塔を建てようとした。が、神が言語を混乱させたため塔は建てられなくなった)。「プロメテウス」(彼は火を人間に与え、その使い方を教えた。が、そのためゼウスに罰せられ、人間には、パンドラの函によってあらゆる災禍、災難がもたらされる。)近代では、ドストエフスキーや、H・G・ウェルズがこの主題を扱っている。

## Ⅱ 人間と社会の対立

これは人間の本能と人間に課せられた社会的限定との戦いである。

### A 性的戦い

- 1 性的衝動と近親相姦のタブーとの戦い(日本では、軽の太子と軽の娘子)
- 2 性的衝動と一夫一婦制や慣習との戦い(文学の大部分はこれである。マダム・ボヴァリー、アンナ・カレーニナ、その他多くの三角関係、多角関係の小説)
- 3 女性の性本能と解放への衝動(アマゾンの神話、男装の麗人、イブセン、青路社)
- 4 性的衝動と社会的障害の戦い(ロメオとジュリエット、ポールとヴァージニーなど)
- 5 性的衝動と精神的欲求との戦い(仏陀からオルダス・ハックスレーに至る主題)

### B 個人の自己主張と社会的義務との戦い

- 1 種族への義務
- 2 国民への義務
- 3 社会的階層への義務
- 4 一般的社会への義務

C 個人の自己超越的傾向と社会的圧力との戦い、または、感受性の強い主人公と冷淡な社会との戦い

1 美的自己超越に重点をおくもの(芸術家と社会の戦い、象牙の塔の主題)

2 倫理的総合に重点をおくもの

ここで主人公の価値体系はその時代の通俗的価値体系と異り、彼は結局、純心素朴な、または狂気の、または愚かれた愚者として現われる。(「ドン・キホーテ」、「オイレン・シュビーゲル」カミュ「異邦人」など)

Ⅲ 二つの相いれない忠誠心の対立

例えば、男女の愛と愛国心の対立(アントニーとクレオパトラ、秘密結社のジレンマなど)

Ⅳ 目的と手段の対立

形而上学的価値と現世的価値との戦い、あるいは、個人生活の尊厳と集団への関心との対立。

V 人間と時間の対立

これは人間の永遠、不死への願望と、限りある生命、すなわち避けることができない死との対立である。あるいは、親の世代と子の世代との間に生れる、ものの見方考え方の違いによる対立でもある。(「ダビデとサウル」から「父と息子たち」に至る諸作品、あるいは「チボー家の人々」などの主題)

この戦いはまた、時間と関係のない人間の本性(本能、伝統)による要因と時間の働きによる要因(生物学的衰えと社会的変化)との戦いでもある。

Ⅵ 運命と意志の対立

この対立には文学の発達につれて大きな変化がある。ヤコブ記においては、運命は人間の意志に絶対的服従を強要する嫉妬深い神の姿をとっている。エデッブス王においても、運命は、エデッブス自身には自分の自由意志で行

動していると思わせながら、予め決められた運命を履行させる狡い、意地悪い力として現われる。ところがルネッサンスを転機としてエリザベス朝の劇に明らかな変化が起った。「ヘンリー四世」以降、シェクスピアの主要人物は、外部の運命の力の犠牲者ではなく、内部の運命の犠牲者であり、盲目の運命の犠牲者ではなく、彼等の内にある盲目の感情の犠牲者となった。

かくして、人間の意志と運命の間の戦いは、

理性と感情の対立

精神と肉体の対立

心と身体の対立

というような対立に内面化され、変形されるに至った。そして結局

人間の自由意志と遺伝と環境による決定論の対立

という二律背反に落ちついた。(イブセン・ストリンドベルヒ、ゾラの自然主義) こうして、原子、染色体、及び自然の法則というものが、かつて神や運命によって演じられた役割を引き継ぎ、「上からの運命」は「下からの運命」によってとって代られた。しかし、人間が背負う苦しみというものは依然として人間から去ることがない。

以上が、文学の主題における対立についてのケストラーの分類の大要である。なかなか示唆に富む考え方であるが、もっと整理し、単純化して私は次のように考えてみたい。

I 人間の欲求や意志とそれを阻む自然との対立

A 人間の欲求や意志とそれを妨げる自然、または天との限界

B 人間の不変への願いと移り行く時間の対立

## C 人間の欲求や意志とそれを妨げる運命の対立

## II 人間の欲求や意志とそれを阻む社会との対立

## A 男女の愛と社会的規制との対立

## B 自我の主張と社会との対立

文学における無数の対立を以上のように分類することには無理があろう。しかしこのように大きな対立に分類してみることは、文学を理解する上にも役立つことであらうと思われる。

## 3 論説における対立

論説やエッセイの主題となる対立にはどのようなものがあるのか。論説やエッセイの主題で、文学の主題と重なるものがあるのは当然のことであるが、文学よりもさらにはるかに多いのではないかと思われる。これを尽すことは今のところとてもできないし、敢て分類することは大変な冒険である。しかし、エッセイを書くにあたっての実用的便宜にはなると思われるので、その分類を大胆に次のように試みた。

## I 人間の正しい認識とそれを妨げるものとの対立

## 1 抽象思考と具体思考

## 2 外形尊重と内面尊重

## 3 技術尊重と精神尊重

## 4 主観的把握と客観的把握

## 5 積極的態度と消極的態度

## 6 知性と感情

7 部分と全体

8 巨視と微視

Ⅱ 自我と他者との対立

1 自我の独立、主体性の確立

2 個と組織との対立

3 自由と束縛

4 孤独と連帯

Ⅲ 人間と自然との対立

1 素質と努力

2 生命と物質

3 機械と人間

4 豊かさと貧しさ

Ⅳ 空間や時間における対立

1 日本と外国

2 中央と地方

3 昔と今

V 人間と人間の対立

1 父と子

2 男性と女性

3 さまざまな気質

- ① 藤原正彦「数学者の言葉では」新潮社 昭56・5 以下引用も同書による。
- ② ヨゼフ・ピタウ「大学と人間教育」研究センター報第五号 昭56・3 (関西大学一般教育等研究センター発行)
- ③ 清水幾太郎「論文の書き方」岩波新書昭34・3
- ④ Arthur Koestler, *Insight and Outlook*, University of Nebraska Press 1949.

(未完)